話題

地震大国の希望

岩﨑葉子

眼鏡をかけてハキハキと語るハサン君は，ニキビあとに少年ぽさも残している。見るからに賢そうな，行儀の良い，しかしにこにこして親しみやすいイランの好青年である。

「最大の活断層の周期はおよそ110年と言われていて，いますでに40年ほど超過しています。ですからまあ，いつきてもおかしくないわけでして」

にこやかにハサン君が語るのは，もちろん地震のはなしである。イランが日本同様，いわゆる「地震の巣」であるのは周知の事実だが，彼はそのイランにあって将来を嘱望される地震科学者（のたまご）なのである。

最近高層建築がめだつようになってきたテヘランでは，この手の話題に市民の関心が高い。その場に居合わせた者たちはそろって「テヘランでは，どこにいれば助かるか」などと素人まるだしの安直な質問を浴びせかけるが（筆者も含む），ハサン君は研究者らしく，

「地盤的に最も強固と考えられているのは大バーザール周辺ですが，建造物が古いですから，倒壊の可能性から言って安全とはいいかねます。また，北部および南部には大きな断層があり，楽観できません。西部にはいずれの中規模断層からも比較的遠いと考えられる地区が点在しますが……」

などと厳密に答えている。

この日ハサン君は晴れがましい留学を控えて，挨拶まわりをかねて知人宅を訪れたのであった。彼はこのたび地震研究で名高い国外某大学の超難関スカラーシップを獲得した。なんでもその枠は4名分しかなかったという。

「このうち3名がイラン人，残る1名が日本人なんです」

ハサン君はまだ見ぬ同級生の同郷人である筆者に微笑みかけた。テヘランでぐらっとくるたびにやみくもに恐怖を募らせていたが，こういう若者がイランにもどんどん誕生していると知って希望がわいた。机を並べて研究した両地震大国の若者がいずれ立派な科学者となって必ずや帰国し，故郷の安全に貢献してくれる日がくることを心待ちにしている。

（いわさき　ようこ／地域研究センター）